

●ル・ポルタージュ

北神戸をゆく

(9)

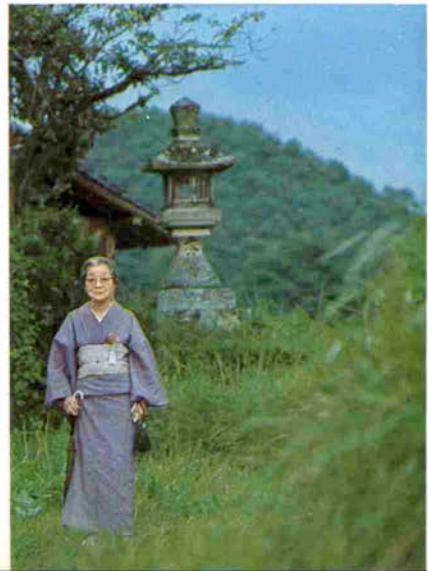
山田の 鷺尾家

黒部

亨

（作家）

▲山田町の旧鷺尾家跡に立つ鷺尾治衛さん
鷺尾家に代々伝わる秘宝の品々。



古来、戦場における勝敗の帰趨は、智略、兵力、補給

力といった表面的な戦力のほかに、微妙な運不運といつたものによって決せられる場合が多いようである。川中島合戦における「霧」、桶狭間合戦における「風」、富士川合戦における「水鳥」——数えあければいくらでもあるが、要するに自然現象や時刻が勝敗の分岐点となつた例は史上に少なくない。近代戦においても同様である。

源義経が一の谷合戦で平家を撃滅し、源軍大勝利のもとをつくった蔭にも、いくつかの幸運が指摘できる。中でも特筆すべきは、地元のすぐれた道案内人を獲得したことである。

現在のように精密な地図や磁石類の完備した時代とは異なり、当時においては優秀な案内人はゆうに数百数千の戦力に匹敵する場合がある。その意味からも、史上名高い鶴越の嚮導役を勤めた鷲尾経春は、源氏にとって大

恩人の一人といつてよかろう。

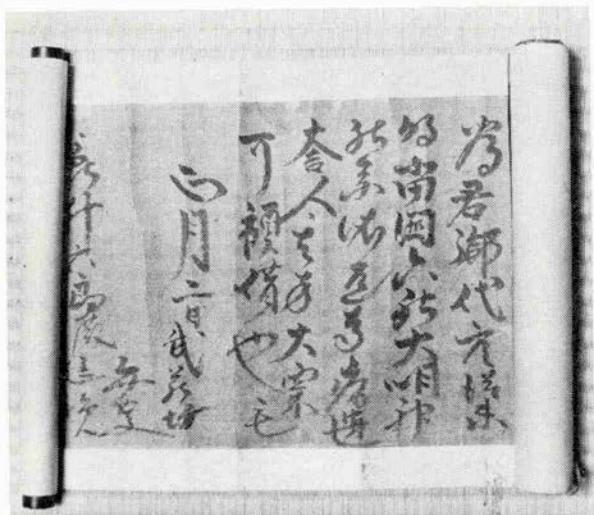
その経春がはじめて歴史に登場する記念すべきくだりを平家物語から拝借すると——

「頃は二月初の事なれば、峯雪村消えて、花かと見ゆる所もあり。谷の鶯音信れ、霞に迷う所もあり。登れば白雪皓として聳え、下れば青山峨々として岸高し。

松の雪だに消えやらで、苔の細道幽なり。(中略) 駒を早めて行く程に、山路に日暮れぬれば、皆下居て陣を取

る。爰に武藏坊弁慶、或老翁一人具して参りたり。御曹司あれはいかにと宣へば、是は此山の獵師で候と申しければ、扱は案内能く知りたるらん。いかでか存じ仕らでは候べき。(中略) 御曹司、馬場ござんなれ、鹿の通はんする所を馬の通はざるべき様や有る、さらばやがて汝案内者せよと宣えれば、此身は年老いて如何にも叶ひ候まじと申す。

扱汝に子は無きかと尋ね給へば、さん候、能王として



上・珍しい弁慶の借用書

下・義経からあたえられた「五本骨の扇」の拝領紋

生年十八歳に成りける小冠者を奉る」

この小冠者（十七歳ともいう）が経春で、長身で容貌魁偉、剛胆そのものの若者だった。義経は一見してただ者ではないと見てとり、とくに「鷺」は諸鳥の中でも勇の鳥だから勝利の前徴なりと縁起をかついで部下に加え、鎧や武具をあたえたうえに、自分の一字をあたえて義久と名乗らせた。

鷺尾家はもと伊勢の桑名の出である。能王丸が生まれて間もなく、わけあって一家離散の憂目にあり、能王は乳母の故郷である摂津丹生山田荘小河へ連れて行かれ、乳母の家で獣師として世をしのんでいるときはからずも世に出る機会に恵まれたわけである。



摂津名所図繪に描かれた鷺尾家の「義経腰懸石」

以後、彼は片時も義経のそばを離れず、一の谷、屋島、壇ノ浦と転戦して武功をあげ、義経から小河、東下村の地を安堵された。

しかし、文治五年（一一八九）四月、義経が衣川の戦で敗死したとき、経春も彼に殉じて討死した。時に弱冠二十二歳だったから、武士としての華やかな活躍期間はわずか数年間というはかなさである。たゞ彼は奥州平泉時代に一子小太郎義時をもうけていた。義時は父の討死後、故郷の山田荘に帰つて帰農し、本貫の地桑名から先祖の墳墓を東下村にもちかえり、菩提寺である福田寺（東下字東所）に祀つた。

以後鷺尾家は代々この地に定着して威を張ることになる。

◇

六月下旬、取材班は兵庫区山田町下谷上三ツ樋二〇三の鷺尾光具さん（52）宅を訪ねた。光具さんは同家二十七代目の後裔にあたる。当主ご夫妻と母堂治衛さん（78）の接待をうけながら、さつそく経春の逸品を拝見する。いずれも家宝として代々引き継がれてきた由緒ある品々である。

まず目を奪われたのは二振りの大太刀。長いほうは全長一・八三メートル、刃渡り、一・三四メートルで無銘の棒鞘。弁慶から贈られたものといわれている。短いほうは全長一・五六メートル、刃渡り一・一〇メートルで同じく無銘の棒鞘。こちらは龜井太郎から贈られたものといいつたえられている。

どちらも一人では抜けないから鞘を從者にもたせて抜き、「斬る」というより「難ぐ」ための武器。両手にもつてみるとすっしりと重く、とても柔弱な現代人に振りまわせるしろものではない。鎧かぶと身をかため、馬上でこんな大刀を縦横に振りまわして戦つた当時の人は、よほど豪力ぞろいにちがいない。刀身は黒く錆びているが、当時の迫力はじゅうぶんつたわつてくる。

義経から拝領した紺製の日の丸の旗が二旒。現在の日の丸にくらべて赤丸の部分が大きい。どういうときに使用されたものか不明だが、白旗の源氏が日の丸を使っていたということは興味ぶかいことである。

朱塗りの椀が大小五個。いずれも鷲尾家の家紋「鷲の羽」が描かれている。この椀に飯や勝栗を盛つて義経に供したといわれている。家紋といえればいま一つ、義経からあたえられた「五本骨の扇」の拝領紋もあるし、「義経公腰懸石」という石もあつたという。

文書類としては家系図一巻のほかに由緒書の類が数点。中に弁慶の借用書というのがあって興味をひく。弁慶らしい力強い筆蹟で、宛名は亀井六郎となっている。読んでみると、この地の七社大明神まできたとき弁慶の馬が病気のため使用できなくなつたので、亀井六郎から大栗毛を一頭借りたことがわかる。

大合戦を目前にして、ゆうゆうと馬の借用書を書いている弁慶の律義さがうかがえてほほえましい。一の谷合戦であれまわった弁慶は、実は借りものの馬に乗つていただけで、馬が討死しては大変だとビクビクしていたのかもしれない。七社大明神の鳥居にかけられている

◇
同じ山田町東下にある鷲尾家の屋敷跡を訪ねてみる。
△
治衛さんがかたわらからつましく口をそえる。治衛さんの話によると、県内にも鷲尾姓はいくつあるが、経春系の濃い流れは明石江井ヶ島のト部家と、九州（筑前）の黒田家に仕えていた小河家で、小河家は九州から江戸へ上るとき必ず山田までやってきて先祖の墓に香花を手向けたという。



弁慶から贈られたという大太刀見る筆者。183cmもある

額の文字も弁慶の筆といわれている。

「わたしが子供のころには、まだいろんなものがたくさんあったんですね。鎧や刀類もありましたよ。家宝の刀で庭の木を切つたりして祖父に叱られたことをおぼえています。ひょっとすると押し入れの奥にまだ文書類がたくさんあるのかかもしれません。なにぶん忙しくて整理するヒマがないんですよ」

と、光具さんは届託がない。それでも数百年前の遺品を、今日まで虫くいや盗難、火災から護ってきた日々の苦心はなみたいていのことではなかつただろう。

いまはそうでもないが、鷲尾家の先祖はこれら家の宝を人に示すときは、必ず身を清め、ほとんど神につかえるように扱つてきたという。もちろん火災のときはなにはさておいてもこれを護ることがしつけられてきた。

「鷲尾家では代々、この宝物を墓守りのできない子孫には渡すなどいう家訓がございましてね。嫡男が家を継ぎますと、その人だけが鷲尾姓を名乗つて、あとは小河姓を名乗ることになつていました」

「明治二十年ごろに家連が衰えてしまいましたね。神戸の兵庫区にいたんですが、昭和十七年ごろに現住所に越してきました。なるべく故郷の地に近いほうが多いだろうとのことで……。わたしはよく知りませんが、古のなかには旧屋敷時代のことを覚えていてくれる人がいるかもしれませんね」

最盛期には近郷にならぶ者のない大地主で、西は長田から東は灘のあたりにかけて広大な田地を所有していたがつて代々郷土につくした功績も多く、同町中村の八幡神社に現存する三重塔（準国宝）は、先祖の左馬之坂義政という人が鎌倉から高名な宮大工を呼び寄せて建立させたものである。毎年同社の祭礼には鷺尾家の当主が白馬にまたがって祭りの先頭をきるという。

屋敷跡の真北、東下字東所にある曹洞宗福田寺は、鷺尾家の建立した菩提寺で、もとは同家のみの寺であったが現在は四〇あまりの壇場をもつ。本堂横に独立の位牌堂があり、代々の位牌が数多く合祀されている。

久昌院殿義道宗本大居士

鷺尾愛之四郎義久

文治五年潤四月晦日於奥州討死

ひときわ大きいその位牌が経春のものである。

二十歳で奥州の地に散った経春は、死の直前にふるさとの山河を脳裏に想いえがいたかもしれないが、これほど手厚く自分の靈をまつてくれる子孫のことまでは思ひ及ばなかつたにちがいない。

そんな感慨にひたりながら、閑寂な寺をあとに鷺尾山の中腹にある墓地に向う。

左右に樹木の生い茂つた細いぬかるみの道をあえぎさえぎ登る。その昔、義経軍が経春の案内で小河へ抜け、藍那へ抜けた道と思われ、いまは神戸電鉄の源平コースとして君臨した鷺尾家の濫觴の地である。

「根津名所図会」に屋敷の全景が描かれている。一町

四方の豪壮な構えで、周囲に土塀と濠をめぐらし、背後を鷺尾山に護られ、前方に丹生山を望む文字通りの平和境である。

三木へ通ずる市バス111路線を西へ行くと、丹生山登り口の鳥居の南一帯がその跡で、いまは満々と水をたたえた青田の中に、大きな石灯籠が一基。屋敷跡を想わせる遺構は何一つのこつていらないが、ここが數百年間大庄屋として君臨した鷺尾家の濫觴の地である。



秘蔵の品を前に取材する筆者（左端）右隣鷺尾治衛さんと光具さん夫妻

そういえば、さつき福田寺の住職がおもしろい話をしてくれた。古老たちの言いつたえによると、この道を通ると「山が鳴る」というのである。つまり平家側に言わ

せると、平家滅亡のそもそもその原因は寿永の合戦の敗北にあり、その直接原因は義経の奇襲作戦にある。さらにそのもとを手繰つていけば道案内をした鷺尾経春にある。憎むべき奴は経春だということになり、平家の亡靈がその怨みをこめて鷺尾家の山を鳴らしているというわけである。

薄暗く湿った道を登つてみると、青色の不気味なヘビが足もとに這いだしてきた。これも平家の亡靈がヘビに姿を変えて出てきたのかと思わずギョッと立ち停まる。

いまに山が鳴りだすのはあるまいかとおつかなびつくりたつたが、さいわいその気配はなく、青く澄んだ初夏の空で樹々の梢がわざかにゆれている。

鷺尾家の墓地は、道の分岐点を左に折れた平坦地にあり、累々と苔生した石塔をつらねていた。

墓地は石垣によつて上下二段に分かれ、上段中央部に古びた小型の五輪がかたまつてゐる。あるものは倒れ、あるものは傾き、あるものは欠けて歳月の隔たりをものがたつてゐる。石が風化してるので文字はまつたく読めないが、様式の古さからみで鎌倉から江戸初期までのものがほとんどのようである。

その右側にひしめきあつてゐるのは家臣団の墓といわれる。石垣の下にも墓石がならんでゐるが、こちらは方形のものばかりで、文字もはつきり読める。江戸中期以降のものが多い。

「うちはいまでも土葬でしてね。このまえ亡くなつたわたしの父もそうでした。しかし墓地も手ぜまになりましたから、わたしの代からは一か所に祀る方法にしようかと思つてゐるんですがね」

と光具さんが言う。

古い五倫を眺めていると、想いはしそんに過去へさかのぼつていく。

この五倫の一つ一つの下に眠る靈たちはいつたいどのように生き、どのように死んでいった人たちなのだろうか。

人間いたるところに青山ありとはいっても、故山の土に還ることはやはりあわせなことである。

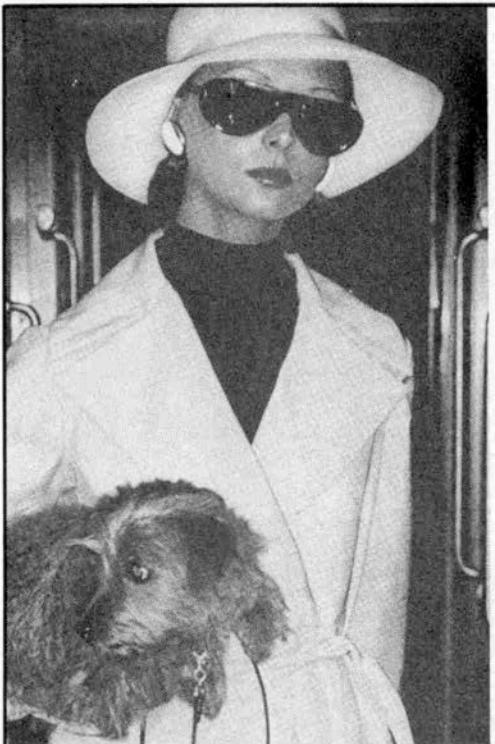
源平合戦という歴史の大エポックに立ちあつた経春の靈は、連綿とづく子孫の繁榮をどのような想いで眺めているのだろうか……。

見わたすかぎり濃い緑に埋まつた静寂な山田の里は、過去の出来事などは何一つ知らぬげに、ようやく猛暑の季節を迎えようとしていた。

(次回は淡河の「石峯寺」)



鷺尾家の歴史をものがたる苔生した石塔



秋の日のサングラス 夏の思い出と新しい思いでに旅立ついま

輸入サングラス・メタルグラス
ファッショナブルなおしゃれグラスが
新しく入ってあります

顯微鏡・天体望遠鏡・航海計器・光学器一般

服部メガネ店

神戸・大丸前 TEL 331-1123

